

質疑応答・意見交換要旨

「天橋立周辺地域の景観まちづくり活動の発展に向けて」

事務局 : ・観光地としての意識、町並み、自然など、さまざま要素を持つ景観まちづくりの中で、出石、城崎などは、「町並み保存」、「まちづくり」が日々の産業である観光との結びつきを意識しているように感じる。「観光」というキーワードと町並み保全、環境保全、自然風景の保全などに関する事例はないか。

・日々の暮らしの中に天橋立が中心にあり、それを取り囲むように町並みがある。室津などは港の風景があり、それを皆で守ろうという意識がある。どのように皆が風景を共有、意識して取り組まれているのか。

・兵庫県豊岡、出石、城崎などとの広域的なネットワークに係わる話があったが、具体的なことなど補足願いたい。以上、三つの点について伺いたい。

八木先生 : まず一点目の観光の問題について。観光はたくさんの方が訪れることが基礎になる。その時に業者間で競争が必要になるが、お客さんに対して「迎合」という形で観光のあり方が進むと問題ではないかと考える。

この地域は、基本的な景観の構成として日本三景の天橋立とその周辺にある自然景観と人工的景観との調和がある。それを見てもらうことが一番の喜びだという主張を持って欲しい。日本三景という位置づけだけでなく、天橋立の価値を人々が認識するようになれば、たくさんの方々に来ていただける。それは一箇所の地域の価値が高まるだけでなく、近隣地域とのネットワークにもつながるが、観光の情報や動きはパッケージングされるので、天橋立の魅力を知りつつ、その周辺の伊根や街道沿いの町並み、出石、城崎などと連携し、周辺のことも考えた上で情報発信する。その中でこの地域での魅力を発信できるかどうかの一つの大きな条件ではないかと考える。

二点目については、例えば、赤穂市の坂越という町は、T字型の構成の港町で生島という島があることで、天橋立と同じように入り江が静かな港の環境を作り出している。そのような海、山、町という関係で生み出されている環境をここに住んでいる方は空気のように感じている。その良さは、住んでいる方は理解できないが、外から来られると今まで見たことないような良さ感じてもらえて、また来たくなる。

参加者 : 宮津の住人として、いい知恵が浮かばないというのが正直なところ。地域の方、特に女性の意見も聴いて、今真剣に考えないといけないと思う。

参加者 : 見せていただいた事例が多岐に及んでいて、具体的な内容が少ないと感じる。それぞれの地域の事例をもっと具体的に紹介してもらえると、もっと参考になるように思う。

事務局 : 具体的な項目やここが知りたいというようなポイントなどあるか。

参加者 : 当地として一番関係があるのなら、伊勢の内宮や高山などの事例はどうか。

八木先生 : 伊勢には伊勢神宮という集客の核があり、内宮の駐車場との関係で注目されて整備されていく。それは市の助成で整備されたのではなく、融資で行われた。それほど、地元の方々、お店の方々の経済的基盤があり、一つの方向性を打ち出していった。まず、赤福がおかげ横丁として整備していたことで、モデルが作られていたということが非常に大きいのではないかと。35万人しか来なかったのが、今や300万人を超える人々が来るようになった。初詣の時だけでなく、いつ行ってもにぎやかな町並みを楽しめるところがあるという認識ができるようになった。

参加者 : 坂越の事例の中に白いマンションの写真があったが、この地域にも似たようなものがある。建物の色を変えるような事例はないか。

八木先生 : 景観条例の中で大抵は、大規模建築物について色彩の規制が盛り込まれている。ただ、問題は、色彩調査をした上で目になじむ状況の範囲であればよいということで認められるが、そうした時、彩度のない無彩色(白に近い色)の場合は明度に関係なく、割と認められることが多い。そうすると、山の前に建ったときに非常に目立つ。これは天橋立周辺にも言えることではないか。色彩の規制をする場合、背景との関係を把握して、地域ごとで設定すべきではないか。

参加者 : 岩滝は天橋立の中でも内陸の方なので観光と言われても、ちょっと縁がないように感じる。天橋立が観光のキーワードになるのはわかるが、行政区も違って、なかなか同じような意識が持てない。もっと共有できるようなテーマを持てるようになって初めて、景観づくりの方向づけができるのではないか。

八木先生 : 兵庫県佐用町に星空景観形成地域が指定された。もともと佐用町は4つの町に分かれており、天文台の観測にとって光の影響は地域ごとに様々であった。しかし、指定の際にほとんど苦情がなかったのは、非常に問題がわかりやすかったからだと思う。広域について大雑把な目標を設定してしまうと、ある地域では問題を起すケースが出てくる。色彩の問題にも同じことが言える。地域ごとの違いと、それを乗り越えるようなわかりやすい目標、テーマをきちんと作り上げることが必要だと思う。

参加者 : 宮津に新浜という古い民家が残っているまちがある。住人たちは新しいものに建て替えたいと思っているはずだが、それらを残したいと思っている。一般の方に残していこうと思える価値や意識づけをどのように行うかということについてと、そのような運動について教えていただきたい。

八木先生 : 公共的な支援で、ある地域について応援できる仕組みをつくるのが一つ大事であるが、何よりも大事なものは、その古い民家に住み手、使い手がいるかどうか。その方が建物の命をさらに未来に繋げていくという気持ちを持たれるかどうか。その時に、実際に再生に成功した事例を見ていただくことが一番の説明になり、納得していただける場合が多いと経験から感じる。

事務局 : 天橋立では景観計画の制定に向けて、これから各地域のルール作りが必要になるが、兵庫県において、住民主体で作られていったルールを法的なものに繋げたような事例などをご紹介いただけないか。

八木先生 : 兵庫県の景観条例の場合でも、景観形成地区に指定する以外に、実際に自分達で協定を結ぶ地域もある。かつての加美町というところは、自分達の集落で協定を結び、村にふさわしい景観形成を進めていこうと動いている。このように条例の中に協定を結ぶような部分を残しておくことが大事だと思う。一般的に地区指定するとなると条件などが厳しくなるが、兵庫県では制度自体は柔軟で、なんとかルールを守って下さいという善意を引き出すような景観形成の仕組みになっている。条件にあえば、行政的、財政的な支援もするというように動いている。一般的なまちづくりを行ううえでも、景観形成地区に指定されていると公共的な支援もあるということで、景観形成地区に対する関心も高まっている。

事務局 : 加古川の本町地区の事例における活動の主体は、住民が行政のどちらか。

八木先生 : アーケードが架かっている古い商店街で閉店が続くシャッター通りであった。そこで、アーケードを撤去した。そうすると空き家を建て替えようとする開発行為がどんどん起こったが、そうした行為に対する危機感から、開発の手が及ばないようなルールを作ったり、古い町家を残そうと地元が動き出したので、それを応援している。

参加者 : 今の組織のままの取り組みでいいのか、カリスマ的なリーダーを含め、中心的に育てていく組織を新たに作っていく方が良いのではと感じるが、何かヒントをいただきたい。

八木先生：出石の場合は、元々「出石城下町を活かす会」から始まり、まちづくりを展開する中で、商業的な活性化も行ってきた。それをまちづくりと連携させ出資を得ることで、TMO（まちづくり会社）として、非常に珍しいが、配当のあるTMOになった。まちや地域に対する思い入れで、お金を払ってでも協力したいという方式が定着している。それらを支えているのは、一定数の観光客が来ていることにあると思う。

また、広域の連携や新しい組織を作るときは、カリスマ的なリーダーも必要だが、外から来た人が地域に関わりたくなるぐらい、その地域に魅力があることが出石の特徴だと思う。全体として地域への愛情が直接的に協働につながる条件が基本にあり、組織を作っていくとうまくいくのではと思う。先に組織ありきではなく、そのような伝統を作りあげて、組織ができていく。天橋立というキーワードでこの地域は結びつく条件がある。みなさんが地元で考えているよりも天橋立は価値のあるものだと思うので、それを外の人にもっと語らせたらいいと思う。そうするとみなさんの考えも変わってくるのではないかな。